

# 英語・日本語における空間・時間に関わる格標識： 日本語母語話者による英作文学習者コーパスにみられる誤用類型

望月 圭子  
キャロライン狩野

はじめに

1. 東京外国語大学英作文学習者コーパスの概要
2. 空間・時間を表す格標識 in/on/at の誤用類型
3. in→on: 「移動事象」と ON
4. in→at: 「概念化された場」と AT
5. in→at: 「事象のひとまとまり性」と AT
6. at→in: 「内部構造をもつ事象認知」と IN
7. on→in: 「空間的・時間的內部構造」と IN

むすびに

はじめに

本稿の目的は、空間・時間に関わる格標識 in/on/at 及び「に」と「で」に焦点をあて、英語学習者コーパスにみられる誤用を通して、誤用のタイプを考察し、学習者の母語の体系がどのように第二言語習得に影響するかを考察することにある。

本稿で扱う英語学習者コーパスは、東京外国語大学において、2011 年度及び 2012 年度前期に、キャロライン狩野が担当する英語専攻 Academic Writing 及び副専攻の Production Skills の授業において収集された学習者コーパスに、イギリス英語及びアメリカ英語のネイティブスピーカーが添削を行い、誤用項目を抽出し、データベース化されたものである。本英語学習者コーパスを以下、東外大英作文学習者コーパス(2011-2012)と呼ぶ。

第二筆者(キャロライン狩野)は、大学教育における英作文指導に 30 年の経験をもつ。その添削経験から、一般に「前置詞、テンス、冠詞、語順」が、頻度数が多い誤用文法項目として、重要であると考えられる。このため、本プロジェクトでは、前置詞、テンス、冠詞、語順の 4 種類の誤用を学習者データから抽出し、誤用データベースの作成をすすめている。

ちなみに、第一筆者(望月圭子)が、東京外国語大学における自身の講義(2012 年度秋学期、正規学生 1 年生～4 年生及び交換留学生在履修する英語による講義)『Japanese Grammar with

Comparative Perspectives from English'で、日本語を母語とする履修者 50 名に対して「英語学習の困難点」三項目を質問した。その結果、「英語学習の困難点」として以下の(1)に挙げるように、「前置詞、テンス、冠詞、語順」の順に多く、「前置詞、テンス、冠詞、語順」を優先的に誤用項目として抽出することは英語学習者のニーズにこたえるものである。

- |                             |      |
|-----------------------------|------|
| (1) a. 前置詞 (特に in/at の使い分け) | 23 名 |
| b. 時制 (特に過去と過去完了の使い分け)      | 20 名 |
| c. 冠詞 a/the                 | 20 名 |
| d. 語順                       | 11 名 |
| e. 単数・複数                    | 6 名  |

本稿においては、前置詞の誤用の中でも、空間・時間に関わる格標識 in/on/at の誤用例に焦点をあて、対応することが多い日本語の「に」と「で」との対照を通して、考察をすすめる。

## 1. 東京外国語大学英作文学習者コーパスの概要

このプロジェクトは、東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門プロジェクト (2010-2013) 「日本語学習者の母語・地域性を踏まえた日本語教育研究」において、日本語・英語間の対照言語学的視点からの誤用研究を目的に進められている。東外大英作文学習者コーパス (2011-2012) の概要を以下に述べる。

まず、プロジェクトチームは 10 名で、監修者として教員のキャロライン狩野、望月圭子、英作文添削者として、ロンドン出身のキャロライン狩野のほか、3 名の英米の英語母語話者が下添削作業、5 名の学生が英作文学習者データベース及び誤用抽出データ作成を担当した<sup>1)</sup>。

収集期間、学習者数、学習者の英語能力の範囲、英作文総数、語数は、表 1 のとおりである。

(表 1) 東京外国語大学英作文学習者コーパスの概要

期間	学習者数	学習者の英語能力	英作文総数	語数
2011年4月～ 2012年8月	111人 1) 英語専攻1年生 クラス 2) 副専攻1年次 クラス	TOEIC 平均点 788点 最高点 990点 最低点 525点	261作文数 授業外課題 として辞書 を使用した 英作文	87,494words

英作文収集協力を依頼したクラスは、二種類のクラスで、キャロライン狩野が担当する英語専攻 1 年生必修クラス **Academic Writing** のクラスと、副専攻語としての英語クラス（英語以外の外国語を主専攻とする 1 年生）のクラスである。東京外国語大学では、入学時に TOEIC を受験する機会を学生に与えており、協力学生の入学時における TOEIC の平均点は、788 点である。

作業の方法及び内容は以下のとおりである。まず、協力を依頼するクラスにプロジェクトリーダー及び望月圭子がプロジェクトの概要を説明した。さらに、①教育研究が目的であること、②学習者コーパスにおいて、個人情報とみなされる氏名、英語能力試験の点数、英語学習歴、英語圏での居住歴、英語による教育歴等は、個人情報保護法に基づき厳密に管理され、個人を特定する形での公開を行わないこと、③誤用データベースは、学習者にも公開し、フィードバックを行うことを説明し、同意した学習者に、承諾書に署名してもらい、さらに学習者情報アンケートの提出を求めた。結果として、履修者全員がこのプロジェクトへの協力を同意し、のべ 111 名の学生からの協力を得た。111 名の学習者に ID 番号をふり、学習者情報（氏名、性別、年齢、母語、教育言語（複数の教育言語の場合はすべて記入）、日本国外での居住歴、英語学習歴、英語能力試験（TOEIC、英検、TOEFL、IELTS のうち受験した試験のスコア全て）の点数をデータベース化した。

英作文は、授業時に執筆されたものではなく、課題として辞書を使用して執筆されたものがあり、e-learning を通してワード書式で提出された。この英作文に英米英語の母語話者がコメント機能を用いて下添削を施し、教員の監修を経て、添削前の提出原稿と、添削後の英作文データをデータベース化した。添削後の原稿は、執筆者本人に返却した。さらに、添削後の英作文データから、誤用数が多い誤用項目（前置詞、テンス、冠詞、語順）別に誤用を抽出し、誤用データベースを作成した。チームは、毎週 2 時間の検討会を行い、誤用データベースに、正しい英語表現について説明する添削情報を加える作業を行った。

以下、本英作文学習者コーパスにひろく見られる誤用の一項目として、空間・時間を表す格標識 **in/on/at** の誤用について焦点をあて、具体例を挙げながら、誤用パターンの分類、誤用の要因について考察を進めていく。

## 2. 空間・時間を表す格標識 **in/on/at** の誤用類型

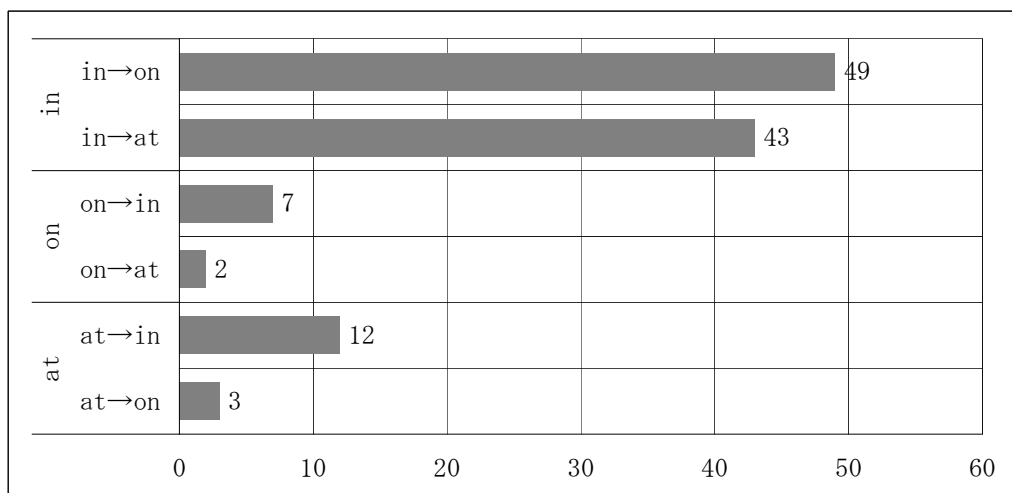
東大英作文学習者コーパス(2011-2012)において抽出された空間・時間を表す格標識 **in/on/at** の誤用は、116 例あり、その誤用類型の内訳は、表 2 に示す通りである。

(表2) 空間・時間を表す格標識 in/on/at の誤用数

英語学習者の誤用 in/on/at (誤用→正用)						合計
in		on		at		
in→at	in→on	on→at	on→in	at→on	at→in	
43	49	2	7	3	12	116

表2が示すように、in/on/at の誤用 116 例のうち、in の誤用が 79%(92 例)を占め、最も顕著である。表2をグラフ化して、各誤用タイプの誤用数をよりわかりやすく示すと、表3のようになる。

(表3) 空間・時間を表す格標識 in/on/at の誤用数



以下、各誤用の具体例を考察し、なぜ in の誤選択が顕著であるのか、なぜ日本語を母語とする学習者が、in/on/at が表すどのような空間・時間概念を習得しにくいのかについて考察したい。

### 3. in→on: 「移動事象」と ON

今回の調査で、誤用抽出 116 例のうち、49 誤用例(42.2%)と、最も誤用数が多かったのが on を使うべきところに、in を用いた誤用である。とりわけ、移動事象に用いられる on に関わる誤用が多い。

まず、49 例中 40 例(学習者数 18 名)と最も用例数が多かった、train に on ではなく、in をつけている用例を以下に挙げよう。各誤用文の後に付された( )内の番号は、執筆年度、学習者 ID を示している。下線は筆者による。

- (2) Why do the Japanese often sleep in the train? (2012.6)
- (3) It was only the case of workers before, but these days, there are many young people who sleep in the trains. (2012.15)
- (4) The safety in Japanese trains is also one of the reasons that enables them to sleep soundly. (2012.22)
- (5) That is why for them, it is a place of rest and relaxation in the trains. (2012.24)
- (6) Previously, office workers mainly slept in the train, but nowadays, young people also sleep in them. (2012.28)
- (7) The safety in Japanese trains is also one of the reasons why people feel relaxed enough to sleep. (2012.29)
- (8) The average sleeping time of office workers is about seven hours, and office workers working very hard and students studying for exams chronically lack sleep, so it is in the train that they can sleep well. (2012.30)
- (9) In the trains, the heating is on in the winter and the air cooling is on in the summer, but the heating from under the seats makes people feel especially sleepy in the winter. (2012.39)

以上の誤用例は、課題が『英語で話す「日本の謎」Q&A』(板坂元監修、2006) p.72 の、以下の(10)に示す日本語文の英語への翻訳課題中の誤用であるため、train に in をつける誤用が集中している。(10)中の下線部は筆者によるものである。

(10) Question:なぜ、日本人は電車の中でよく眠るのですか。

Answer:

以前はサラリーマンが主でしたが、最近は若い連中もよく眠っています。その一番の理由は、特に都会における過酷な通勤、通学時間の長さでしょう。なにしろ東京や大阪などの大都会では勤め先や学校が遠くなり、通勤、通学に1時間以上ということが珍しくないのです。

サラリーマンの平均的睡眠時間は約7時間となっており、働き過ぎのサラリーマンや受験勉強に追われている学生たちは、常に慢性的な睡眠不足の状態であり、電車の中は恰好の憩いの場所となるわけです。

日本の電車の中は、冬は暖房、夏は冷房という至れり尽くせりで、特に冬、座席の下から出てくる暖かい空気は人の眠けを誘います。

会社の帰りに一杯ひっかけて、ほろ酔い機嫌で帰る時ともなると、これまた、座ったとたんにグースカとなるのも必然です。

日本の電車の中の治安のよさも、安心した眠りができる理由でもあります。最近はいくつか物騒にはなりましたが、仮にぐっすり寝込んで、バッグや財布が盗まれたりすることは、めったにないのが日本なのです。(以下省略)

(10)の日本語文を英語へ翻訳する課題は、英語専攻の2クラス、計40名の学生が取り組んだが、そのうち18名が、**train** に **in** を誤選択している。この誤用の要因として、(10)中、下線を引いた「電車の中」という表現が、学習者に **in** の誤選択へと導いている可能性が高い。

ここで興味深いのは、日本語では、「電車の中」「車内」といった「～の中」「～内」といった空間辞が乗り物の空間表現として典型である点である。一方、英語では、「電車の中で乗客が眠る」という文脈でも、**train** には、**in** ではなく **on** を用いる。これは、**on** の用法の一つである、「公的交通手段に乗って」という用法によるものである。タクシーや個人所有の飛行機、キャンピングカーの場合は、**on** ではなく、**in** が好まれる。

さらに、『ジーニアス英和辞典第四版』では、**on** の項目に、以下の例文が収録されている。下線は筆者による。

(11) I saw a beautiful Mt.Fuji while I was on [in] a plane.

飛行機に乗っている間に私は美しい富士山を見た。

こうした幸運は、飛行機に乗っている際にしばしば経験することがあるが、「機内から左手に富士山がご覧いただけます」といった機内アナウンスの表現をみても、日本語においては、公共の乗り物であっても、「乗り物空間の内部」という空間認知が典型であり、その典型的空間認知は、「機内」という空間表現に反映されている。

公共の交通手段に **on** が用いられる要因として、プロジェクトチームの英語母語話者による直観として、以下の二種類の要因が挙げられた。

第一に、「乗り物」には、かつての主要な乗り物であった「馬に乗る」‘on a horse’という概念から派生している可能性がある。「馬に乗る」という行為には、「高いところへ昇る」、即ち‘step up’という移動概念が結びついていて、モノとしての「馬」、ひいては「列車」や「飛行機」は、いずれも「上方移動」という概念と結びつくことになる。このため、**in** ではなく、高い場所としての着点を平面として捉えた **on** が用いられる可能性が考えられる。

第二に、公共の交通手段は決まった経路を移動するため、路線図がイメージされ、公共交通

が、平面的な移動事象として認知されて、on と結びつく可能性が考えられる。

一方で、日本語においては、こうした空間認知による空間表現の使い分けはなく、日本語を母語とする学習者にとっては学習困難点となる。

次に、「on をつけるべき出来事」に in を用いた誤用例を挙げる。対応する日本語訳は、筆者によるものである。

(12) I enjoyed skiing in my high school trip. (2011.30)

修学旅行中、私はスキーを楽しんだ。

日本語では、「旅行中」と、「～中」というアスペクト的に「過程」を表す表現が対応し、この日本語表現が、in の誤選択をひきおこしていると思われる。

ところで、『コアレックス英和辞典第 2 版』では、on の項目で、11 番目の意味記述として、以下のような記述をしている。下線は筆者による。

(13) 《行動の途中・従事・目的》...の目的で；...の途中で，...に携わって，取り組んで∥

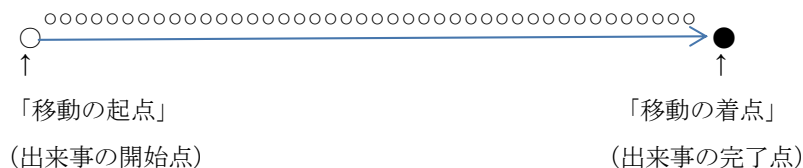
Let's go on a trip./ She will go to Europe on business[a holiday].

ここで一つの提案として、on は、空間的・時間的に、「経路」(PATH)というイメージスキーマと関連しているのではないか、という視点を提示したい。つまり、以下の図に示すように、物理的には「移動現象」の「経路」、抽象的には、出来事の内部構造中のアスペクト的な「過程」という認知概念と結びついているのではないだろうか。以下、on の用法を概念化したものを ON と表示する。

(14) 「経路」(PATH)のイメージスキーマと ON

「移動の経路」 route/course/train/airplane

(出来事の過程) trip/business/holiday



(14)では、●は、物理的移動事象では「起点」及び「着点」を表し、物理的移動事象が抽象化されたアスペクトの概念では、「開始点」及び「完了点」を表している。二つの●を結ぶ→は、「移動の経路」または「出来事の過程」を表し、その経路及び過程の上を、○が漸増的に「移動」または「時間移行」している。ONの基本義は、「接触」であるが、経路上に「移動するもの」または「アスペクトの各局面」が「接触」しながら「移動」「移行」していく、というイメージスキーマとONの基本義「接触」が結びついている。

こう考えると、なぜ公共の交通手段には on がつくのかが理解しやすい。公共の交通手段には、路線図がイメージされ、一定の経路を移動するからである。タクシーは、狭い空間に「乗り込む」ため、in が用いられるという説明もあるが、タクシーは一定の経路を移動する交通手段ではなく、路線図がイメージしにくいことも、on がつかない理由であろう。

さらに、出来事名詞である‘trip/business/holiday’の概念は、私たちの日常生活における時間の流れの上で、さまざまな状態にある一局面とも捉えることができる。

さて、(14)のイメージスキーマは、「メディア・通信手段」のテレビ・ラジオ・電話に on が用いられることの説明にも当てはまる。例えば、以下の誤用例をみよう。

(15) In the Internet, you can get a lot of information on what you want very easily. (2011.28)

(15)の誤用例に対して、プロジェクトチームのある英語母語話者は、「インターネットをみるコンピューターの画面は、平面だから on を使う」という説明を加えている。しかし、より概念化された視点から考察すれば、メディアが「情報伝達」という移動現象を意味的に内包するとすれば、(14)のようなイメージスキーマで説明が可能である。

日本語においても、「通信」という事象が、(14)のようなイメージスキーマとして捉えられる言語現象がある。それは、日本語で「細長い形状の名詞」につく助数詞「～本」が、「手紙一本/電話一本」のように、「細長い経路」上の伝達として捉えられる現象である。日本語におけるこうした現象を考えると、「通信」が(14)のような移動事象のイメージスキーマとして捉えられることの概念化の普遍性が示唆され、ONの用法をこのように指導することも有効ではないかと考えられる。

このほか、誤用例として、以下の二例が挙げられる。

(16) First, they should arrest those who have violated copyrights in a large-scale, not everyone who has violated them. (2011.28)

(17) Therefore, Japanese people always want to know about how they appear, through the way in



which foreigners think about Japan, so as not to embarrass themselves in the world stage. (2012.35)

‘scale/stage’は、移動現象を内包しないが、(14)のようなイメージスキーマ上の、○であらわされる各点がある一定の線上に並んでいるイメージと重なりあい、ON の概念と結びつく。

#### 4. in→at: 概念化された場と AT

次に、in の過剰使用による誤用のうち、at とすべきところ、in を用いている誤用例について考察する。at の基本義は、「点」であり、空間や時間を「ひとまとまり性」をもつものとして認知される場合、at が用いられる。しかし、日本語を母語とする英語学習者は、この用法を習得することがむずかしいようである。

まず、このセクションでは、「概念化された場」につく AT の用法に関わる誤用例をみよう。最も多い誤用例は、17 名の学習者が‘school/university’に in を誤選択している例である。

- (18) When people began to take a gloomy view about the possibility for a resolution of global warming, Robert Socolow, who is a professor of physics in Princeton University, released a certain theory. (2011.8)
- (19) I have changed thanks to the experience of my club activities in my high school. (2011.27)
- (20) When I was in elementary school<sup>2)</sup>, I stood for the student council and did my duty as vice president. (2011.33)
- (21) There are a lot of food and drinks stalls in the university run by students. (2011.63)
- (22) Indeed, I wanted to continue badminton in university too, but recently I have become more interested in many other activities. (2012.7)
- (23) In those days in the language school, I met a Japanese girl. She was a student at one of the most famous universities in Japan. (2012.11)
- (24) In the school, I studied English diligently in order to enter TUFs, Tokyo University of Foreign Studies. (2012.15)
- (25) I don't have a concrete idea right now of what I want to be in the future, but I guess I can find out while I'm in this university. (2012.16)
- (26) I also began to hope that I could study English in university. (2012.17)
- (27) Actually, it is hard for me to do the preparation for every class, but I am sure I will still be able to have a wonderful time in TUFs. (2012.20)

- (28) I'm reading English in this university. (2012.19)
- (29) I have to say thank you to an American whom I met in my junior high school. (2012.20)
- (30) I chose the English course in TUFS just because I want to be able to speak English. (2012.22)
- (31) I found that getting along with your seniors at your workplace is different from relationships with your seniors in school. (2012.23)
- (32) When I was in junior high school, I really detested English. (2012.24)
- (33) However, there were many people who could play the piano much better than me in my junior school and high school. (2012.35)
- (34) Without this experience, I would not be in this university. (2012.39)

上記の例では、'school/university'は、「学校/大学」という本来的機能をもつ共通概念の場、すなわち「ひとまとまり性」をもつ「概念化された場」として認知され、その内部の構造は問題とされていない。「ひとまとまり性」をもつ「場の概念化」は、マクドナルド、ディズニーランドといった、誰でも知っていると思われる場においても起こり、at が用いられる。以下は、at が用いられるところに、in を誤選択した誤用例である。

- (35) In McDonalds, the hamburgers are ready made and just need to be defrosted. (2011.60)
- (36) On the other hand, in Tokyo Disneyland, people have to queue for each attraction and spend a considerable amount of time waiting without any seats to sit on. (2012.14)

一般に、私たちの日常生活に欠かせない場、「学校、職場、オフィス、駅、郵便局、銀行、スーパーマーケット、ホテル」等は、ある一定の機能をもつ場として共通理解があり、そうした場として認知される場合は、ひとまとまり性をもつ場として、点としての at が用いられる。

しかし、こうした場が、本来的機能をもたない場合、空間の内部として認知される場合は、in も可能である。興味深い例として、以下の誤用例が挙げられる。

- (37) We went to Shiga Kogen in Nagano, and we stayed in a hotel for three days. (2011.30)

(37)が意味するところは、「志賀高原に行ったけれども、吹雪がひどくて、あるいは体調が悪くて、ずっとホテルに閉じこもっていた」という意味で、ホテルがもつ共通概念としての本来の機能をもつ場として認知されているのではなく、「ホテルの中にずっと閉じこもっていた」

場としての物理的なホテル空間である。

#### 5. in→at : 事象のひとまとまり性と AT

出来事が、一つの事象としてひとまとまり性を持ち、点として認知される場合も、学習者にとっては、習得がむずかしい。例えば、「クリスマス」「お正月」「オリンピック」「学園祭」「パーティー」などの出来事は、その出来事の時間的・内部的構造に焦点を当てない限り、一般的には、at で表される。

- (38) In ancient times, people prayed for good harvests during the year to come in sho-gatsu. (2011.24)
- (39) The amount of money you receive usually increases as you get older, and “Otoshidama” is a custom that many children look forward to in New Year. (2011.34)
- (40) In a freshman gathering, shy people often have difficulty in meeting or socialising with others. (2012.24)
- (41) We practiced dancing very hard everyday, so our class won the first prize in the party. (2011.30)
- (42) Also, people like to watch them, for example in the Olympics. (2011.55)

以上、ひとまとまり性をもつ「場」及び「出来事」に at がつく場合に、in を誤選択する例を考察した。

#### 6. at→in: 内部構造をもつ事象認知と IN

at とすべきところに、in を誤選択する誤用例とは逆に、in とすべきところに at を誤選択した例も 12 例みられた。以下の誤用例は、いずれも「内部構造をもつ場や事象」として認知される文脈があるために、in が用いられ、4 および 5 節で述べた「場」や「事象」を「ひとまとまり」として概念化されたもの」として認知しない例である。

まず、次の(43)は、後に「熱帯雨林の 70%が木である」という内部構造を認知させる文脈が与えられているため、at ではなく、in がふさわしい。

- (43) At the rainforests, seventy percent of plants are trees. (2011.9)

また、「試験」という出来事は、その時間的・内部的構造が認知されるため、一般的には in がふ

さわしい。

(44) I am always very happy when I hear the news that my sister has got a high score at a test, or my brother has hit a home run in the baseball game. (2011.30)

ちなみに、アメリカ英語では、「試験」をモノとして捉えて「平面的な紙」のイメージで‘on a test’とする場合もある。

次に、コンサートという出来事をひとまとまりの事象と捉えるならば、‘at the concert’と at が用いられるが、以下の(45)では、コンサートの内容の順番についての言及を含む文脈があり、コンサートという出来事の内部構造に言及しており、in がふさわしい。

(45) The first piece I will play at the concert is the "Eroica" by Beethoven, which is very difficult and requires an advanced technique. (2011.39)

また、home は一般的に概念化された場として、at home が一般的だが、(46)のように、家にいる時間と、外にいる時間といった文脈が与えられると、「家の中に存在している」という意味で、in がふさわしくなる。

(46) It can be said that we spend more than half of our everyday lives at our homes. (2012.1)

以下の(47)(48)の例「戦争」「第三年次」も、ある一定の時間幅をもつために、ひとまとまりとして認知せず、時間的・内部的構造をもつ出来事として認知されるために、in がふさわしい。

(47) However, after the Meiji period, European ideas and culture came to Japan and they experienced bitter defeat at the Pacific War. (2012.26)

(48) She practised hard every day and she was the leader when we were at the third grade. (2012.34)

最後に、以下の誤用例にみられるように、地名は一般的に in がつく。

(49) Haiku Kousien was held at Ehime prefecture, which is where I am from. (2012.36)

## 7. on→in: 空間的・時間的内部的構造と IN

このタイプの誤用例は、7例みられた。「様々な状況」「分類」「社会」「人生」「思想」

等の概念には、内部構造が認知されるために、in がふさわしいが、on を誤選択した例である。

- (50) Such differences between the Japanese and the Americans were found on many situations at school. (2011.26)
- (51) It can be classified on mainly two types: Environment-type and Compensation-type. (2011.8)
- (52) In actuality, there are too many causes of stress to count on present-day society, and most of them are difficult to remove. (2011.17)
- (53) However, too many fast food chains may be the cause of problems on people's life. (2011.49)
- (54) Today, people often place an emphasis on time, and this can be seen on the famous proverb "Time is Money". (2011.52)
- (55) Without his invitation to the cinema, I would not have encountered the lines mentioned above at such an early stage on my life. (2012.11)

#### むすびに

本稿では、東外大英作文学習者コーパス(2011-2012)から抽出された、in/on/at の誤用の類型に焦点をあて、in が関わる誤用例について考察した。考察の結果として、以下の六点が挙げられる。

- (56) a. 日本語を母語とする英語作文コーパスにおいては、空間・時間を表す in/on/at の誤用 116 例のうち、in の過剰使用が 79%(92 例)を占め、最も顕著である。
- b. 日本語を母語とする英語学習者の誤用では、以下の三類型が顕著である。
- 1) 移動事象において、on を使うべきところ、in を誤選択する。  
e.g. skiing {\*in /on } my high school trip  
sleep {\*in /on } the train
  - 2) 概念化された空間がひとまとまりの場として認知される際に、at を使うべきところ、in を誤選択する。  
e.g. when I was {\*in /at } the elementary school,  
{\*In /At} McDonalds, the hamburgers are ready made and just need to be frosted.
  - 3) 時間的にひとまとまりとして認知される行事・事象に、at を使うべきところ、in を誤選択する。  
e.g. our class won the first prize{\*in /at } the party.  
{\*in /at }New Year/ {\*in /at }the Olympics

以上の結果から次の二つの疑問が生じる。

第一の疑問として、なぜ日本語を母語とする英語学習者は、**in/on/at** の使い分けが困難なのであろうか？それは、母語である日本語において、**in/on/at** に対応する格標識として、「に」と「で」が挙げられるが、両者の使い分けは、空間認知に基づくものではなく、統語的な要因に基づいているからである。

「に」と「で」の使い分けは、述語の「必須項」(obligatory argument)か、「随意項」(optional argument)かによって決められている。即ち存在の概念を内包する述語の必須項には「に」、命題の「場面設定」(scene-setting)として、文全体の修飾機能をもつ場合には「で」が用いられる。つまり、空間を表す「に」と「で」の使い分けが、述語の語彙特性によって決められているのである。

英語と日本語の空間を表す格標識は、その使い分けが、英語では空間概念、日本語では述語の統語的性質といった、異なる基準で決まっているため、日本語を母語とする英語学習者と英語を母語とする日本語学習者は、ともに学習言語の空間を表す格標識の習得がむずかしく、誤用が多くみられる。ちなみに、日本語の誤用データベースについては、東京外国語大学 GCOE(2007-2011)「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」HP 中、「日本語学習者言語コーパス」ページ <http://cblle.tufs.ac.jp/lc/ja/index.php?menulang=ja> において、「オンライン日本語誤用辞典」として、自由に閲覧できる辞典として一般公開しているので、ご参照されたい。

第二の疑問は、なぜ東外大英作文学習者コーパス(2011-2012)では、空間・時間を表す **in/on/at** の誤用 116 例のうち、**in** の過剰使用が 79%(92 例)を占め、最も顕著なのだろうか？その要因として、学習者が、英語で空間・時間を表そうとする際に、まずデフォルトとして、**in** を選択するのではないかという仮説が考えられる。では、なぜ学習者は **in** をデフォルトとみなすのだろうか？その一つの要因として、日本語においては、名詞に後続する空間表現としての「～のうち」「～のなか」「～<sup>内</sup>」や時間的過程を表す「～中」といった表現が多く、母語におけるそうした語彙が **in** をデフォルトと認識させる可能性がある。また、複合動詞において、空間内部への移動を表す「～込む」が、複合動詞の後項成分として最も使用頻度が高いという事実も、日本語の空間表現が、**in** の概念と結びつきやすい可能性がある。

また、日本語における内部を表す空間表現は、必ずしも明確な内部構造をイメージさせるものではない。一方、英語では、**in** が明確な内部構造のイメージを内包するという点において、**at/on** の空間認知とは、異なっている。

本稿で提示した、「内部構造」の **in**、「経路/過程」としての **on**、「ひとまとまり性をもつ概念化された場/出来事」としての **at**、という認知言語学的視点からの教授法は、日本語を母語と

する英語学習者には、効果的な教授法と考えられる。

## 注

- 1) Rachael Fowlie(イギリス英語母語話者)、Kieran Richardson (イギリス英語母語話者) 及び Nathan Yeldell (アメリカ英語母語話者) の3名が下添削を担当した。また、英作文学習者データベース及び誤用抽出データ作成には、大熊洋祐、荒川和仁、斎藤翔太、滝澤吉広及びパメラ・シャオウェン・ポンの5名が担当した。
- 2) アメリカ英語では、in も可能であるが、at がより一般的である。

## 参考文献

### 1. 使用教材・辞書

- 『英語で話す「日本の謎」Q&A』2006. 板坂元監修、講談社。  
 『ジーニアス英和辞典第四版』2006. 小西友七主幹、大修館書店。  
 『コアレックス英和辞典第2版』2011. 野村恵造主幹、旺文社。

### 2. 学術図書・論文

- 方美麗 (Fang, Meili). 2004. 『移動動詞と空間表現』白帝社。  
 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会。  
 池上嘉彦. 1993. 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマー—日本語の「ヲ格+移動動詞構造」の類型的考察」『外国語科紀要 vol.41.No.3』p.34-53. 東京大学教養学部外国語科。  
 Kageyama, Taro. 2003. “Why English Motion Verbs Are Special” *Korean Journal of English Language and Linguistics* 3(3),341-373.  
 影山太郎. 1996. 「日英語の移動動詞」『英米文学』 Vol. XL, No.2 Ser. No.53. 91-121.  
 影山太郎・由本陽子. 1997. 『語形成と概念構造』研究社出版。  
 影山太郎. 1999. 『形態論と意味』くろしお出版。  
 影山太郎. 2000. 「自他交替の意味的メカニズム」『日英語の自他の交替』33-70.ひつじ書房。  
 片山晴一. 2009. 「日本語と英語の移動事象における経路」『日本研究教育年報 13』東京外国語大学日本課程. 25-43.  
 国立国語研究所. 1997. 『日本語における表層格と深層格の対応関係』三省堂。  
 丸尾誠. 2005. 『現代中国語の空間移動表現に関する研究』白帝社。  
 益岡隆志・田窪行則. 1987. 『日本語文法セルフマスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版。  
 松本曜. 1997. 「空間移動の言語表現とその拡張」『空間と移動の表現』125-23.研究社。  
 松本曜. 1998. 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114:37-83.  
 言語学研究会(編). 1983. 『日本語文法・連語論』むぎ書房。  
 望月圭子. 1993. 「場所に関わる『に』と『で』—中国語との対照から—」『松田徳一郎教授還暦記念論文集』370-381. 研究社。  
 小野尚之. 2005. 『生成語彙意味論』くろしお出版。  
 Pustejovsky, J. 1995. *The Generative Lexicon*. MIT Press.  
 Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.  
 杉本武. 1986. 「第3章：格助詞」奥津敬一郎(編)『いわゆる日本語助詞の研究』231-391. 凡人社。  
 鈴木重幸. 1972. 『日本語文法・形態論』むぎ書房。  
 Talmy, Leonard. 1985. “Lexicalization patterns : semantic structure in lexical forms” *Language typology and syntactic description vol. III*. Cambridge University Press.57-149.  
 Talmy Leonard. 2000. “A Typology of Event Integration” *Toward a Cognitive Semantics, vol. II: typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA: The MIT Press. 213-288.

- 田中茂範. 1997. 「空間表現の意味・機能」『空間と移動の表現』1-123. 研究社.
- Tenny, Carol. 1995. "Modularity in thematic versus aspectual licensing: Paths and moved objects in motion verbs" *Canadian Journal of Linguistics* 40 : 201-234.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
- 寺村秀夫. 1993. 『寺村秀夫論文集Ⅱ—言語学・日本語教育編—』くろしお出版.
- 角田太作. 1991. 『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語』くろしお出版.
- 上野誠司・影山太郎. 2001. 「移動と経路の表現」『動詞の意味と構文』40-48. 大修館書店.
- 王軼群 (Wang, Yi-qun). 2009. 『空間表現の日中対照研究』くろしお出版.
- 吉川千鶴子. 1995. 『日英比較 動詞の文法』くろしお出版.



## Case Markers of Space and Time in English and Japanese

—Types of Errors Observed in an Error Corpus of Written English by Japanese Learners

MOCHIZUKI Keiko  
KANO Caroline

The purpose of this Paper is to focus on the English case markers of space and time, in/on/at, and the Japanese 'ni' and 'de', and, with reference to errors observed in A Learners' Error Corpus (TUFS), to examine to what extent the learner's mother tongue influences the acquisition of a second language.

1. While the Japanese equivalents of the case markers in/on/at are 'ni' and 'de', the difference in usage of these two is decided according to whether the predicate is an 'obligatory argument' or an 'optional argument'. In other words, when indicating an actual existing place, 'ni' is used, and when referring to a 'scene-setting', where a modification function over the whole sentence is present, 'de' is used.
2. In contrast to the difference in usage between 'ni' and 'de' in indicating space, which is determined by the lexical meaning of the predicate, the roles of the space and time indicators in/on/at are distinguished according to the types of cognition of space in an event.
3. The difference in usage between the case markers which indicate space in English and Japanese is that in English the concept of space is predominant, while in Japanese it is the syntactical property of the predicate which is the determining factor. As a result of these differing fundamental concepts of space, the acquisition of case markers indicating space in the target language would appear to be equally difficult for Japanese-speaking learners of English and English-speaking learners of Japanese, and the occurrence of numerous related errors can consequently be observed.
4. Within the Error Corpus of Written English by Japanese Learners, of all the 116 errors relating to the space and time indicators in/on/at, the most predominant was that relating to the over-use of 'in', constituting 79% (92 examples).

5. This remarkable over-use of the preposition ‘in’ by Japanese learners of English when in doubt as to how to attempt to express the concepts of time or space, can perhaps be explained by an automatic selection of the preposition ‘in’ as a prototype of the spatial or temporal concept.
6. Among the errors made by Japanese learners of English, the following three types of errors are particularly evident.
- 1) With phenomena of movement, where ‘on’ should be used, ‘in’ is erroneously selected.  
e.g. skiing {in /on } my high school trip/  
sleep {in /on } the train
  - 2) With the concept of space recognized as one whole, where ‘at’ should be used, ‘in’ is erroneously selected.  
e.g. when I was {in /at } elementary school./  
{in /at } McDonalds, (the) hamburgers are ready made and just need to be efrosted.
  - 3) With the concept of things and phenomena recognized as one whole in time, where ‘at’ should be used, ‘in’ is erroneously selected.  
e.g. our class won the first prize{in /at } the party./  
{in /at }New Year’s(米)/New Year(英)/ {in /at }the Olympics